

「畏こみ 畏こみもの申す」

増山雄三

わが家は、先祖代々「神道」を信じていたが、私が小学三年の頃、家族一同が集まった神事で、近くの神社からやってきた宮司が、長々と祝詞をあげたあと最後に、「畏こみ畏こみもの申す・・」と締めくくった。

その畏こまった言い方が可笑しかったのだろうか、神妙に座っていた二つ上の兄が、その言い方を聞いて突然笑い出したので、その後、父親にこっぴどく叱られたのを覚えているが、私にとっても、神道なんていうものは、そんな程度のものでしかなかった。

ところで、神道には教祖も教義もなく、この島にいた古代人は、地面に顔を出した岩の露頭一つにも、底の磐根の大きさを思い、また奇異を感じてそれに畏れを覚えれば、その周りを清め、みだりに汚さぬようにしたが、

それが、古神道というものである。
むろん、その時には社殿は必要としなく、社殿は遙か後世に、仏教が伝わってくると、それを見習って出来たものだが、三輪の神は山で、大和盆地の奥にある、円錐形の丘陵そのものが、古代以来、神であり続けていて、ここに唐破風造の拝殿が出来たのは、ごく近世の江戸中期のころである。
そんな古神道にも、多少のご利益はあったようで、日本書紀には、神功皇后の航海を住吉の神が守護した話があり、この神には三柱あり、海面や海中それに海底という自然が、畏敬の末に神格化されたものようだ。
このように、自然をもって神々としてきた日本人が、仏教が渡来した時、従来の神々は淡泊過ぎて、迫力に欠けると思ったが、それ以上に驚ろかされたのは、埴輪程度の古拙なものしか知らなかった彼らは、生けるが如き釈迦像の人体彫刻で、しかもそれには、鑄銅に金メッキが施されていた事だ、

「西蕃の献れる仏の相貌、端巖し」と、欽
明天皇の驚きの表現が記されているが、それ
でも、金銅仏を含めた仏像が、ガンダーラで
始めて造られたのは、二世記ごろだったよう
で、四百年もかけ日本にきた事になる。
とはいえ、大和の宮廷では神道派が反対し
たが、その後曲折を経て、斑鳩の地に法隆寺
が造営されるまで仏教は盛んになり、神は没
落してしまっただが、僧たちは神々に経を聞か
せて救おうとし、祭神を濟度する神宮寺が作
られ、それで神々は没落を免れた。
そんな時、ここに「八幡神」という異様な
神が現れ、後世、津々浦々に八幡社が建てら
れるが、奈良朝までは、大分の豊国にある宇
佐にしかなく、ここには五世紀に渡来した、
渡来人の秦氏一派の小集団が住んでいて、こ
こから異国めいた八幡神が湧出し、「我は応
神天皇である」と名を名乗った。
そして、「古、吾は震旦国（インド）の靈
神なり。今は日域鎮守の大神なり」といった

ので、聖武天皇は仏教で立国しようとしていただけに、八幡神の仏教好きを喜び、宇佐の境内に弥勒寺を建立し、それが神仏習合という同格化の始まりにもなっていて、八幡神の神学が、萎れていた神々を蘇らせたのである。

令和三年十月